あの日　あの時　昭和20年6月10日　　森　大死

あの日の朝、父は横浜へ向かうべく玄関でゲートルを巻いていた。

そこへ、“空襲警報”。「お前たちは防空壕へ入れ、俺は向こうの家を見てくる。
そう言って父は外に出て行った」と母。「向こうの家とは母の実家で近所だった」
「防空壕に入ったら直に爆弾が落ちた」と母。「物凄い音、体が浮かび上がる様な振動、一瞬防空壕の入口の蓋が飛ばされ、その場所に何か大きな物体がズシーンと落下と同時に煙がドウーと入って息が苦しい」この事のみが私の脳裏に残っております。後は全て聞いた話です。

その時の事を母は「苦しくて何も解らないので、この子を抱き上げ突き上げたらポッカリと穴が開いていたんで、そこを素手で拡げて防空壕を抜け出した」外に出たら、「そこは焼け野原だった」と母。その実さながら「地獄絵図」だったのではないか、なぜなら、その後の母たちの言葉で理解できるからです。

父が帰ってこないのでそこらに散乱していた肉片、人骨等集めて辰蔵として葬ったと言っていたからです。

我家は柱が1,2本残っているのみで、周りは爆弾の大きな穴が3ヶはあったと、その中の南西側の爆弾の穴は、私は確かに知っております。つまり戦後2〜3年は埋められず残っていたからです。この爆弾の穴こそ直撃を受けた家なのです。防空壕の事でこの家から誘いがあったそうです。「家の地下に防空壕を掘ったから安心だ。ウチに入りにきませんか？」と後に98歳まで生きた祖母は母に言ったそうです。

「防空壕はウチにもある。死ぬ時はどこでも死ぬ。人様の世話になるな」で母はお断りしたその家なのです。考えて見ますと、私の家の防空壕は爆風で盛土が吹き飛ばされて抜け出せたのですから、その反対に直撃か生埋めもあったでしょう。本当に生死紙一重だったと。

父の事で後日談があります。

それは爆弾から少し落ち着いた頃にその道のその場所が「陰気くさい」「雨の日通ると気持ち悪い」等々あり、近所には行方不明者もいたので皆さんが集まり掘ったら何と私の父が出て来た。爆弾の土砂で生埋めになったと判断された。
改めて葬式を出したら駐在さんに、「おい志さん、あんたの亭主は二人いたのかい」と言われたと母の一口話です。

私がこうして生きているのは防空壕に入っていたからで、外に出ていった父は亡くなった。その「生、死」の境目を恨んだのは後年のことです。67年前の千葉市でこの様な事実があったのです。私はこの様な公開の席で、この話をするのは初めてでございます。自分自身、少し勇気が出てきました。ありがとうございました。